

第6章

形態形式の解釈

第1節 形質 116

(1) 色彩優位型（C型） 117

(2) 中間型（M型） 121

(3) 構造優位型（S型） 124

第2節 形態水準と形態変動性 129

(1) 形態水準 129

(2) 形態変動性 132

(3) 形態水準変動性 133

カラー・ピラミッド・テストにおけるパーソナリティ診断の主役は、もちろん、「色彩(形式)の解釈」です。しかしこれだけではまだまだ十分ではありません。色彩解釈によってもたらされるパーソナリティ診断をさらに深め、肉付け、彩りを与えていくのが「形態(形式)の解釈」です。これによって、カラー・ピラミッド・テストは、よりいっそう奥深い投影法性格検査となっていくます。

第1節 形質

ピラミッドの構造的側面(形質)は、分化性・統合性・柔軟性といったパーソナリティの成熟や特質、さらには不安や神経症など情緒の態様についての情報をもたらします。一般に、パーソナリティが分化的、統合的になるにつれて、ピラミッドは色彩優位から中間型さらには形態優位へと変化します。これは、形質の発達の変化を追ってみたい(図6-1)、適応群と不適応群(例えば非行少年群)とを比較してみれば容易に理解することができます(秋山・丸岡 1961, 宗内^(敦)ほか 1981)。ただ、形質の解釈は、個々のピラミッドを通して行われるのでは

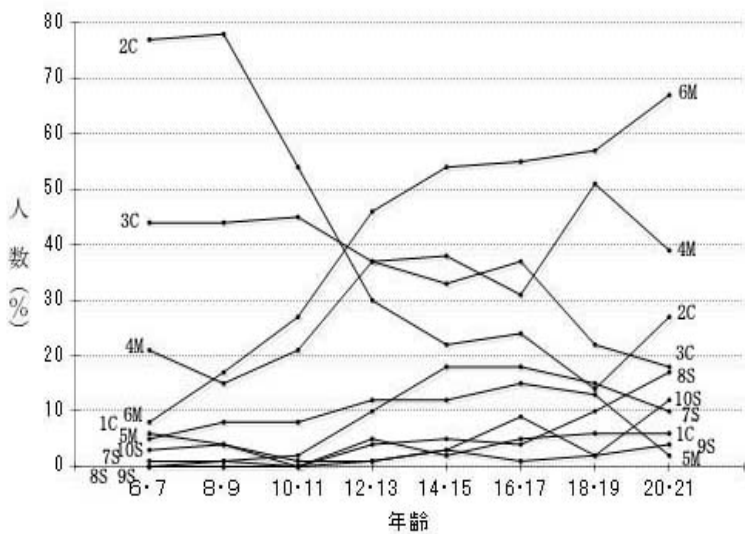


図6-1 形質の反応者率(好P・男)

なく、全体としてどのような形質が作られ、どのような変化性(変動性)を持っているか、その全体性の中で行われるものであることに留意することが大切です。

(1) 色彩優位型 (C型)

通称じゅうたん型と呼ばれる色彩優位型は、ピラミッドという図版の形に捕らわれることなく、まずは色彩(チップ)をピラミッドの中にばらまくことを主眼とするものです。児童期に多く、特に児童期前半では通例的な反応で、好ピラミッド・嫌ピラミッドともに(1個以上の)C型を反応する被検者は95%以上あり(反応者率)、全体として(6個のピラミッドの中で)ほぼ80%の割合で現れます(出現率)。そして1Cを除く2C・3Cでは、ほとんどすべての色彩が用いられており、色彩の好みはあまり強調されません。これは、刺激に対する未分化的な一様な感応性や、関心の深さを伴わない一般的な開放性を示唆しています。このことから、色彩優位型は普通、パーソナリティ構造の未分化、未成熟、不統合、不安定の指標とされています。

＜1C＞ 単一色じゅうたん

病理的人格、あるいは特異なパーソナリティ特性の指標です。

1Cは、色彩優位型の中では特別な反応型で、児童期に圧倒的に多く作成される2C・3Cとは異なり、反応者率・出現率ともに僅少、年齢的変動もほとんどないのが特徴です。このことは、この反応がパーソナリティの成熟－未成熟の次元ではなく、パーソナリティ特性や病理性の次元と関係するものであることを示唆しています。因みに、1Cは、知的障害やある種の統合失調症(旧破瓜型精神分裂病)の被検者に見られる(シャイエとハイス 1964, 川久保 1963a)ほかは、健全なパーソナリティの持ち主にはめったに見られず、不適応な事態に独特な抵抗と防衛の手段を用いやすい人が、時折、テストやテスターに嫌悪感を抱いたり、新しい反応を見出せなくてもがき苦しんだりしたときに、拒否的・退避的行動として作成することがあるくらいです。ロールシャッハ・テストの反応カテゴリーの中に、形とは無縁に色彩の名前だけを取り上げて反応する「色名称称」というのがありますが、単一色じゅうたんはちょうどそれに似て、これが2つ以上出現す

るときには、知的、あるいは情意的に深刻な障害があることを疑ってみる必要があるでしょう。

なお、**1C**の出現は、極端な色彩選択頻度、色彩選択幅の狭さなど、色彩形式に偏ったスコアをもたらすことになり、しばしば全体的な結果の解釈を困難にし、妨害することになります。もしこれが抵抗と防衛の結果生じたものである場合には、反応全体の信頼性と妥当性についても慎重に検討することが必要になると思います。

< 2C > 多色じゅうたん

児童期－青年期を通して、すべての反応カテゴリー(10分類)の中で最も多く出現するタイプです。嫌ピラミッドではどの年齢段階もほぼ一貫して高い反応率(50%前後)ですが、好ピラミッドでは青年期に入って急速に減少します(図6-1)。この、好ピラミッドにおける**2C**の出現率変動の様相は、**2C**がパーソナリティの成熟－未成熟に関する重要な指標たり得ることを示しています。一般的に申しますと、児童期ではむしろ普遍的なことで取り立ててのことはありませんが、青年期以降に**2C**が複数個、とりわけ3個以上作成されるときには、パーソナリティの未成熟、創造性や柔軟性の欠如が疑われます。

* 2C₁ 調和じゅうたん

出現率・反応率がともにトップの多色じゅうたんの中にあってもまたとりわけ多く作られるのが調和じゅうたんです。一般的には前思春期的な未分化・未成熟なパーソナリティの指標ですが、ときには、ポジティブなパーソナリティの指標ともなります。

児童期には普通、一人の被験者が**2C₁**を複数個作ります。これから敷衍すれば、**2C₁**はまだパーソナリティが未発達な段階の未分化・未成熟の指標となるのですが、一方、調和じゅうたんを作成するにはピラミッドの色彩混合が悪くならないようにそれなりの細やかな注意と配慮が必要で、ときには繊細なパーソナリティ特性の指標ともなります。とりわけ、これが児童期特有の複数個作成ではなく1個だけ作成の場合には、必ずしも未分化・未成熟などパーソナリティのネガティブな特徴ではなく、特に他に形態水準の高い型が併存していた

り、色彩形式に未分化性や病理性の徴表がなかったりするときには、むしろ、デリカシーや創造性、柔軟性などの指標ともなり得ます。

＊2C₂ 不調和じゅうたん

児童期までは発達段階に相応する前思春期的なパーソナリティの一般的な投影、青年期以降では情緒的不適応や自我機能の停滞と退行の指標です。

これは、調和じゅうたんとは異なり、細やかな注意と配慮を欠いた色彩のランダム配置によって生じます。2C₁とともに児童期では普遍的な反応ですが、好ピラミッドでは児童期後半から一挙に減少し、以後は数パーセントの出現率しかありません。こうしたことから、2C₂はパーソナリティの分化・統合以前の特徴である前思春期的な未分化・未成熟を示す確かな指標となります。しかし、青年期以降では、多くは色彩の不調和性に対する意図的な選好反応であり、このような場合には、通常、未成熟なパーソナリティというより、情緒的な混乱や不安、あるいは退行現象や適応様式の不安定などが投影されています。

＊2C₃ 分裂じゅうたん

児童期までは前思春期的なパーソナリティの一般的な投影、青年期以降は人格不統合の病理性の指標です。

2C₃は、児童期までは2C₁・2C₂とともに通例的な反応ですが、好ピラミッドでは2C₁よりもやや高出現であったものが、青年期に入ると2C₂よりも低くなるまでに急減少します。これは、加齢とともにパーソナリティの統合化が進み、他の色彩とは調和・混合しにくい白色の使用が嫌われるようになることが反映しています。しかし、分裂じゅうたんは、知的障害・統合失調症など、知・情・意の統合性に障害のある被検者には比較的よく現れる反応です。それ故、2C₃は知的障害、情緒障害、自我機能の障害など、パーソナリティの統合性に深刻な影響を与える障害と関連するものです。但し、他に白を構造化の手がかりとするピラミッドがある場合には、高い芸術的センスと関連することがあり、この限りではありません。

＜3C＞ 構造じゅうたん

児童期－青年期を通じて、2Cに次いで多く作成されます。ただ、2Cとは異な

り、年齢による変動もなく、また好ピラミッドよりも嫌ピラミッドの方が出現率・反応率が高いという、興味深い特徴があります。

構造じゅうたんは、中間型あるいは構造型への過渡的タイプです。ここには、単に色彩の混合だけではなく、ピラミッドの中に一定の秩序を持ち込む努力、敷衍しますと、パーソナリティの分化と統合が進展していく様相が投影されています。しかし、被検者にとっては、この反応(形象)はどこまでも、自己を完成させていく途中であって、常に不充足感が残り、振り返れば不満足なものです。これが影響して、嫌ピラミッド場面で内省的かつ嫌悪的に、好ピラミッド場面におけるよりも、より多く本タイプが作成されるのでしょうか。こうした事象は、**3C**がパーソナリティ発達の過渡的段階を投影する形質であることを示しています。

持ち込まれる構造的性の大小によって、**S**(small)・**M**(middle)・**L**(large)の3つに分けられますが、**S**から**L**へと構造的性が大きくなるにつれて、パーソナリティの分化と統合性は高段階へと進んでいきます。

*** 3Cs 構造じゅうたんSmall型**

構造じゅうたんの大半を占める反応です。持ち込まれた構造的性は最も小さく、成長への萌芽は見られますが、まだ結果が伴わないといったところで、前思春期的未分化性の典型的な指標です。

*** 3Cm 構造じゅうたんMiddle型**

数少ない反応ですが、持ち込まれた構造的性が中程度のもの、あるいは互いに関連しない小さな構造的性が2つ以上あるもので、統合化されていく前の混沌としたカオス的な状態の中から、成長への努力と潜在的の可能性を垣間見させる反応です。

*** 3CL 構造じゅうたんLarge型**

全年齢を通じて一貫して数少なく、特に児童期前半ではほとんど見られない反応です。「じゅうたん模様の中に大きな構造的性を持ち込むということはパーソナリティの構造化(成熟)を必要とする」というカラー・ピラミッド・テスト上の仮説と前提からすれば当然のことですが、**3CL**はまさしく、パーソナリティが混沌から大きくまとまっていく、あるいは大きく変容していく過渡期の様

相を投影しています。なお、**3CL**の構造的性はほとんどの場合、ピラミッドを構成するきっちりとした要点(角と軸)から成り立っており、これは成長・変化とともに生じてくる様々な不安感情を防衛しようとする心理を投影するものでもあります。もし、他のピラミッドがすべて色彩優位型で占められているなら、成熟を阻止するようなリジッドな行動様式、あるいは行動を抑圧するような周囲の環境が存在することを疑ってみる必要があります。

(2) 中間型 (M型)

色彩優位型と構造優位型の中間に位置するものです。それは同時に、投影されるパーソナリティの成熟段階も中間的であることをも示しています。数量的には、パーソナリティの急激な変容を示す児童期後半～青年期前半に減少する色彩優位型、とりわけ**2C**(多色じゅうたん型)とは逆に増加していきます。

中間型は、ピラミッド図形の水平的次元への着目(**4M**)を基本として、整然とした原理があります。それ故、色彩優位型に比べれば、パーソナリティの分化と統合がかなり進んだ段階が投影されていると言えます。しかし、垂直次元にも関与する2次元的・立体的な構造型への移行型(**6M₂**)を除けば、水平次元の枠組みを容易には離れることのできないその固い区画化と反応様式は、特定の枠組みを越えて動く柔軟性の乏しさや体験過程におけるイマジネーションの乏しさを示しています。

＜4M＞ 多色成層

パーソナリティの成熟－未成熟に関する一般的指標となります。

4Mは、中間型の中で**6M**に次いで多く出現する反応です。嫌ピラミッドでは年齢による変動はほとんどありませんが、好ピラミッドでは男女とも児童期後半から青年前期にかけて上昇し、青年期以降はそのまま一定の水準を保ちます(図6－1)。こうした経緯は、**4M**がパーソナリティの一般的な成熟状況と密接に関連する反応であることを示しています。

4Mはピラミッドの各層がそれぞれ単一の色彩で作られ、ある意味、極めて単調でリジッドな構造です。しかしこれが、児童期にあつては主流の色彩優位型の

世界から新しい視点を持ち出しているという意味合いでパーソナリティの分化の徴表となり、一方、青年後期では統合性や柔軟性の欠如など、発達の遅れや未成熟の指標となります。因みに、非行少年群を実験群として行ったいくつかの研究（秋山 1963，丸岡 1967，宗内^(敬)ほか 1981）が、**4M**が健常群（一般群）に比べて未成熟群（非行少年群）の中に圧倒的に多く出現することを示しています。

なお、ピラミッドの各層が、明るい色相を分離したり、鮮明な色彩対照を作り出すことによって顕著な色彩分離がなされているときには、厳しい情緒的な混乱や葛藤の存在が疑われます。

＜5M＞ 構造的成層

上の**4M**（多色成層型）をベースに対称構造など多少の構造化を伴う**5M**（構造的成層）は、その分だけパーソナリティの構造化が進んで、青年期的な成熟を垣間見せる反応です。構造化が水平次元だけの**5M₁**と、構造化が水平次元と垂直次元を結びつけて立体化する**5M₂**の2つがありますが、どちらも数少ない反応です。持ち込まれる構造化の違いはそのままパーソナリティの成長段階の違いを反映しています。

* 5M₁ 対称的成層

4Mの段階に比べて、多少とも反応性に幅が出てきたことを示す徴表です。まだ萌芽の段階ですが、リジッドから抜け出る可能性を感じさせる反応です。

* 5M₂ 立体的成層

上の**5M₁**に比べてパーソナリティの成熟が進み、適度の分化と安定性に達したパーソナリティを投影しています。しかし、成層を基盤に単純な左右対称から成り立っているその構造からは、まだ十分に統合化し成熟した段階には到達することなく、新しい行動様式を採ることに慎重かつ臆病で、適応または防衛としての、柔軟性に欠けた、ステレオタイプのな行動様式が存在することを示唆するものでもあります。

＜6M＞ 対称的構造

児童期後半から青年前期にかけて急激に反応が増加し、特に男子ではさらに青年後期に向けて、よりいっそうその傾向が強まります（図6-1）。これは児童

期後半から青年前期にかけて急激に減少する**2C**(多色じゅうたん)とは全く対照的な流れで、**6M**がパーソナリティの成長と発達を投影する典型的な反応であることを如実に示しています。

ピラミッド図版への構造的な色彩配置という観点からは、**6M**(とりわけ**6M₂**)はすでに最高レベルに達しています。むしろ、後述する構造型の各類型(**7S・8S・9S・10S**)よりも高いかもしれません。しかし、**6M**は、同一被検者によって複数個作られることの少ない構造型反応に比べて、同一被検者によって複数個作成されることが多いという顕著な特徴があります。これはちょうど、同一の被検者によって複数個作られることの多いじゅうたん型の**2C**が児童期の象徴的反応であったように、また同一の被検者によって複数個作られることの多い成層型の**4M**が青年前期の象徴的反応であるのと同じように、**6M**が、これからさらにパーソナリティの進展と変容があり得ること、即ち、パーソナリティの様々な局面を投影する構造型へと移行する過渡的、象徴的反応であることを示しています。

従来、多くの研究者が**6M**タイプの左右対称型の形質をより柔軟な構造型への移行型としていますが、むべなるかな、と思います。

* **6M₁** 単純対称

青年期の段階に対応するパーソナリティの成熟の指標となります。

各年齢を通じて数少ない反応ですが、それでも年齢が長じるにつれて、わずかに反応数が増えてきます。6つのピラミッドを通じて、他に同じ**6M₁**の反応が1個以上、あるいは同じカテゴリー内の**6M₂**の反応が2個以上ある場合には、青年期的な頑なさといった柔軟性の欠けたパーソナリティと一時的な発達の停滞とが、しばしば同時的に見られます。

* **6M₂** 立体的対称

パーソナリティの分化と統合の指標です。

児童期当初から青年前期にかけて急激に反応が増加し、さらに青年後期まで高い水準を保ちます。パーソナリティが成熟し、分化し、立体化していく過程がそのまま投影される反応です。因みに、非行群と無非行群との間で**6M₂**の出現率を比べると、非行群は無非行群のほぼ半分の割合に留まり、この反応が

パーソナリティの成熟と密接に関連していることが分かります。ただ、形質そのものは、2次元的に立体化して構造化が進んでいるとは言え、**6M₁**と同じように、左右対称の全くリジッドな形態です（図6-2）。また、この反応は同一の被検者によって、6個のピラミッド中、2個あるいは3個以上作成される場合が少なくありません。先述しましたように、これは**2C**や**4M**がそれぞれ児童期、青年前期の発達段階的なパーソナリティ特徴を象徴的に映し出しているのと同じように、この反応がまさに青年期的反応であることの証左ですが、このようなケースでは、被検者が青年期的な成熟段階に到達していることと同時に、しばしば、柔軟な思考と行動性が奪われるほどにステレオタイプ化した、強情で自信に満ちた青年期的なパーソナリティを投影している場合が少なくありません。

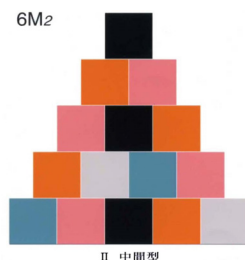


図6-2

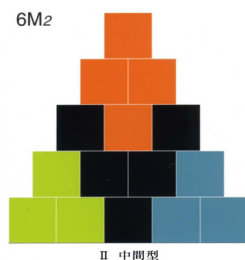


図6-3

なお、**6M₂**を仔細に見てみると、**5M・6M₁**と近似した色彩的に全くの左右対称型と、左右の対称構造が異なる色彩で構成されるタイプ（図6-3）の2つがあります。前者はステレオタイプ的な反応様式が色濃く反映しているのに対し、後者はある程度の創造性やイマジネーションを伴った反応様式を含んでいることが特徴です。また、**6M₂**では、色彩の持つ快あるいは不快の感情価よりも、むしろ作成される構造の形式に依存して色彩が選択されることが少なくありません。それ故、選択数が低くても、ピラミッド構造の重要な要点を占める色彩には、特別に留意して解釈しなくてはなりません。

6M₂は青年期的なパーソナリティの様相を投影する反応パターンです。善くも悪くも、このことを念頭に置いて解釈する必要があります。

(3) 構造優位型（S型）

水平次元から垂直次元、さらには斜行次元、空間次元へと関心が広がり、流動的な色彩配置によって構成されたピラミッドです。これは、パーソナリティが一段と分化し構造化し、それだけにまた心理的に微妙な体験をするようになってきた態様を投影するもので、成熟した青年および成人たることを示唆する典型的な反応です。

構造優位型は、児童期では極めて少ない反応です。これは、まだ未塾で未分化な子どもでは、目に飛び込んでくる色彩とピラミッドのリジッドな側面(芯、角、水平線、垂直・中心線)に心を奪われ、ひたすらそれに対する反応(色彩優位型・中間型)に終始するため、そこから解放された反応をすることがどれだけ難しいか、言い換えますと、これから挙げていく構造優位型のピラミッドが明らかにパーソナリティの高度な分化・成熟の指標となることを示しています。それもあってか、青年期に入ってもなお構造優位型の反応は少なく、加齢とともにわずかに数を増やしていく程度です。

そして一方、構造型の各反応は、どれも反面で心理的な不安や緊張、あるいは病理的な状態と関連しています。これはつまるところ、成熟したパーソナリティだからこそ裏腹に表出されてくる心の陰翳ですが、それだけに、それぞれの反応は、被検者のより個人的、より個性的な心理状況を投影しています。パーソナリティの成熟を示すとともに、それと表裏一体となって関連してくる病理と障害、こうした側面に解釈の糸口を与えるのが、構造型の各反応です。

<7S> マント型

不安と緊張、それに対する抑圧・隠蔽・防衛など内閉の心理状態と関連します。

古くから多くの研究者、例えば、スプリーン(Spreen, O. 1951)によって神経症との関連が指摘され、シャイエとハイス(1964)は、アメリカでは神経症の成人被検者で全反応の3分の1がマント型だと報告しています。しかし、我が国ではそれほど高率ではなく、**7S≡神経症**という図式は成り立ちません。私たちの標準データでは、とりわけ男子の好ピラミッドにおいて、青年前期に反応者数の増加が目立ち、いかにも青年前期の自立と反抗、そして内閉といった葛藤を投影する反応として注目されます。臨床的に言えば、神経症や情緒障害を示す思春期の

子どもに比較的良好に見られます。

この型では、ピラミッドの核を被いつつむ特有の形が、抑圧・隠蔽といった防衛的心理機制の存在を示唆しています。外側の防壁(マント)部分が統制を、核の部分は防衛される情動や欲求と関連しているでしょう。核が同一色ではなく異色の3角形で作られているときには(図6-4)、葛藤や緊張はより複雑だと考えられます。

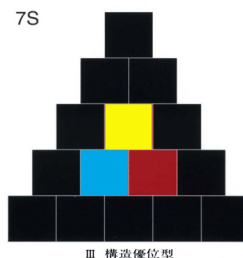


図6-4

<8S> 階段型

不安を体験しつつあること、あるいは、不安を体験する能力やフラストレーション耐性があることの指標です。

これは、形の上からは4Mを120度回転したものです。その限りでは、たやすく着想されて、より多く作られてもよい型だと思われます。しかし、8Sは全反応カテゴリー中、9Sに次ぐ少ない反応で、児童期では極めて稀にしか生じません。一見、形はシンプルでも、心的メカニズムの上から見ると、これを作るには特別な着眼や発想の転換が必要とされるからでしょう。形態上は4Mを単に120度回転させるだけであっても、水平次元できっちり安定している6Mとは異なり、どこことなく不安定な感じがして抵抗感も生まれ、たとえ着想したとしても作成するところまで進まないこともあり得ます。因みに、120度回転させて成層型に戻すとすれば頂点になる(階段模様が一番端の)チップを外すと、ピラミッドはたちまち崩れ落ちるような感覚に捕らわれます。この模様には、意識的あるいは無意識的に、常にこうした不安感や緊張感がつきまとっているのですが、この背景的な情感に耐えることができる、あるいは心のどこかに共鳴し合うものがあるとき、数少なくはあるけれども、階段型ピラミッドが作成されるのです。

多くの研究者が、8Sを神経症の状態の指標としています。しかし、8Sは決してそれだけの指標ではありません。確かに、この反応は激しい不安、葛藤、神経症の問題を持つ被検者によって作成されることが少なくありませんが、基本的には、問題状況を角度を変えて眺める能力や不安を体験しそれに耐える能力を示

唆する、パーソナリティの成熟指標です。

<9S> 波型

内観困難な無意識的不安の存在を示唆します。

これは、下位カテゴリーを含めた全16の反応類型の中でも最も少ない反応です。それほど難しい発想を必要とするようにも思われませんが、児童期はもちろん、青年期以降、成人期に入っても、極めて稀にしか見られません。私たちの臨床的経験によれば、この上から下へ揺らめく模様は、**7S**や**8S**と同じように、不安や緊張と深く関係しています。しかし、不安の内容という点で、それらとは大きな違いが認められます。即ち、**7S**と**8S**において投影される不安は、その原因が例えば就職困難状況とか対人関係とか、被験者自身によって内省的に洞察可能であるのに対し、**9S**における不安は、例えば幼児期の被虐待体験とか近親相姦など、その原因が被験者自身にはほとんど洞察不能な無意識の世界に沈潜しています。これを精神的分析的に言うなら、前者は現実不安(realistic anxiety)、後者は神経症的不安(neurotic anxiety)ということになります。因みに私たちは、このピラミッド型を、統合失調症と重度神経症患者の入院病棟における実験で、小康を得て病状が緩和している複数の被検者の中から最初に見出しましたが、その被検者の誰もが、捉えどころのない不安や緊張に纏わりつかれて苛立ちもどかしがる様^{さま}を見せていました。

9Sは、誰でも容易に着想できる図柄でありながら、なお稀少の精神的疾患の被検者にしか生じてきません。これは、波型が意識の深層部に巣ごもる得体の知れない不安(神経症的不安)を持った被検者の自然発生的な投影反応であることを示唆しているものと思われます。けっして行き過ぎてはなりませんが、ときには精神的分析的な解釈を進めていくことも必要になるかもしれません。

なお、「波型」という名称は、私たちがかつて応用教育研究所のメンバーと共同で本邦初のカラー・ピラミッド・テストの標準化実験を行っている際、当時、応用教育研究所員だった小太刀和男氏の発案によって命名されたものです。

<10S> 非対称力動構造

機能的特性として柔軟性と創造性、情動的特性として不安と緊張の指標です。

男女を通じて、年齢による変動が少なく、好ピラミッドよりも嫌ピラミッドの方により多く出現します。非対称力動構造としてカテゴライズされるピラミッドの中には、構造的という観点からのみ言えば、必ずしも高くはないものもありますが、どの反応もみな、もはや軸・芯・角といったピラミッドを構成するリジッドな側面に縛られることなく、一定の原理に従って柔軟かつ力動的に作成されています。これは、被検者がステレオタイプの思考様式から解き放たれたイマジネーションと創造性を備えた、力動的かつ柔軟な行動様式を持つパーソナリティの持ち主であることを示しています。このように、非対称力動構造は、まずは柔軟性と創造性の指標ですが、柔軟性も創造性も年齢や学習に関わることの少ない資質的なパーソナリティ特性です。それ故、当然、加齢による変動も少ないことが特徴です。標準データ表(巻末付表V・VI)を見れば、**10S**が**7S・8S**など他の構造優位型に比べて児童期初めから比較的多く現れ、またその後の変動(増加)も決して大きくないことが分かります。

10Sはまた、**7S・8S・9S**と同様に、成熟の指標であると同時に、不安や緊張など、ネガティブな情動の指標ともなります。ピラミッドの要点(軸・芯・角)から解放された色彩の点と線の流れは、柔軟性とイマジネーションの豊かさを伝えてきます。しかし一方、受け止め方によっては、安定感の欠けた、何か寄る辺のない頼りなさをも感じさせます。ここに被検者の不安が投影されてきます。そして、このピラミッドが好ピラミッドよりもむしろ嫌ピラミッドでより多く作られるという事実が、**10S**に投影される不安が他の構造型に投影されるそれとはかなり異質でより深層的なものであることを暗示しています。嫌ピラミッドで**10S**を作成した知性豊かな年長の被検者の幾人かが、定かならざる不穏なものに突き動かされ、心のうごめくままに作成した、とテスト後に感懷を述べていますが、それは**7S・8S**における現実不安とは明らかに異なり、また**9S**における神経症的不安よりもなおいっそう出所不詳の性質を持っています。抑圧することも叶わず、しかも止むなく嫌ピラミッドの中に表出される不安—あたかも生そのものに対する不安を訴えているかのようです。これを敢えて名付ければ、原不安(basic anxiety)とか根源的不安ということになります。

10Sは、子どもあるいは情緒的に混乱した人にも比較的良好に見られますが、これが特に嫌ピラミッド上に現れるときには、心理的な素質がよいこと、しかしそれがまだ有効に用いられていないこと、予後に期待が持てることなどが推測されます。また、文章・絵画・造形など芸術的センスに恵まれている場合も少なくありません。

第2節 形態水準と形態変動性

ピラミッドの形質は、加齢とともに、そしてパーソナリティの成熟とともに、色彩優位型から中間型、さらには形態優位型へと変化します。それは、児童期における未分化で平板なパーソナリティ構造が、分化－統合－立体化していく一般的な成熟の過程をそのまま反映しているのですが、その程度や水準を数量的に表そうとしたのが形態水準です。しかしながら、ピラミッド各個の形態水準を単純に足し合わせただけでは成熟度を評価することはできません。例えば形態水準の合計得点が最高スコアの12点でも、これがすべて同じ型の形質を作成して得られた場合と、すべて異なる型の形質を作成して得られた場合とではその意味するところは全く違ってきます。すでにお分かりのように、前者ではステレオタイプの特質を持つ未分化で未成熟なパーソナリティが示されるのに対し、後者では創造性や柔軟性の豊かな成熟したパーソナリティが示されるのです。

パーソナリティの分化－未分化、成熟－未成熟を解釈するには、個々のピラミッドの形質と形態水準に加えて、作成された各ピラミッドの種類数を重ね合わせることが必要です。このため導入されたのが、形態変動性と形態水準変動性の概念です。

(1) 形態水準

形態水準は、ピラミッドの構造化の程度を数量化したものです。**FL₁・FL₂・ΣFL**の3つがあります。好ピラミッド、嫌ピラミッドともに、児童期から青年期にかけて急上昇し、嫌ピラミッドでは青年前期からむしろ下降気味ですが、

好ピラミッドではなお上昇気味で、好ピラミッドと嫌ピラミッドの合算点(ΣFL)は高い水準を保ちます。これをもって考えれば、形態水準はパーソナリティの成熟指標としてかなり役立つことが分かります。図6-5は男子における形態形式の発達的变化を図示したのですが、女子の場合もほとんど同じ変動曲線を示しています。

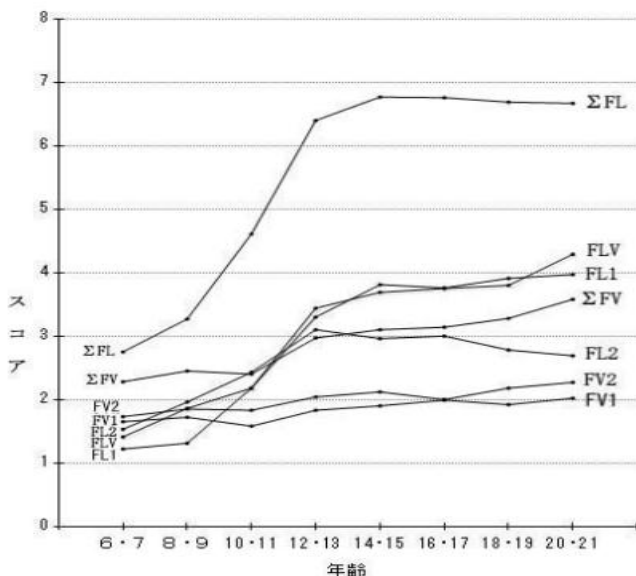


図6-5 形態形式の年齢的变化

<FL1> 好ピラミッドの形態水準（3個の形態水準の合計：得点レンジ0～6点）

意識的、顕在的、内省的レベルにおけるパーソナリティの成熟－未成熟の指標となります。

児童期当初の平均値1.0そこから青年期にかけて急上昇し、その後も緩やかに上昇気味です。これはパーソナリティの成熟過程を素直に反映していると考えてよいでしょう。それ故、各年齢段階の平均値と同程度のスコアを示すときには標準的な成熟が行われていることが想定され、平均値よりもかなり低得点の場

合には、年齢相応の発達に停滞や支障が生じているかもしれないことを疑ってみてもよいと思われます。

<FL₂> 嫌ピラミッドの形態水準（3個の形態水準の合計：得点レンジ 0～6点）

無意識的、潜在的、無内省的レベルにおける行動様式の水準に関係します。

児童期から青年期にかけては、好一嫌というその条件差にさしたる意識が向けられず、むしろ潜在学習や前向き姿勢がはたらいて、嫌ピラミッドの方で好ピラミッドよりも形態水準の高いピラミッドが作られます。これは子ども達がまだ未分化で未成熟であることの証拠です。しかし、青年期に入ると、条件差を明瞭に意識し、嫌ピラミッドの中に、より未発達な段階の行動様式や忌むべきパーソナリティ像を投影する形質の低いピラミッドを作成します。そのため、FL₂の得点は伸び悩み、むしろ低下気味になっていきます。FL₂は一般に、被検者が欲求不満や不適応状態に陥ったときに示す退行現象のレベルとその折のパーソナリティの内実と大きな関連を持っています。

FL₁とFL₂の間に大きな得点差がある場合に、興味深い解釈が生まれます。

FL₁>FL₂のときは、退行現象を生じやすいパーソナリティであること、そして嫌ピラミッドの3つのピラミッドの形質が退行現象を起こすときの未熟な行動様式を象徴していること、FL₁<FL₂のときには、顕在的なレベルでは未成熟が目立つ被検者が潜在的には優れた資質を持っていること、その資質が将来開花する可能性が十分にあることなどが示唆されます。また、FL₁とFL₂がそれぞれ異質な形質でともに高スコアのときは、退行現象を起こし難い耐性の強いパーソナリティが示唆されます。

<ΣFL> 全体の形態水準（FL₁とFL₂の合計：得点レンジ 0～12点）

ΣFLは、概念的には、パーソナリティの分化－統合－立体化の指標になるものです。しかし、本節の初めに述べましたように、FL₁とFL₂を単純に合計しただけでは、その指標とはなり得ません。その指標的な意味合いは、次の形態変動性との兼ね合いで決まり、ときにはむしろ、未分化・未成熟の指標ともなり得ます。こうした解釈上の問題を解決するのが、私たちによって新たに提出された形

態変動性 (FV)，および形態水準変動性 (FLV) という概念です。

(2) 形態変動性

形態変動性は、異種のピラミッドが作られる程度と水準を数量化したものです。 $FV_1 \cdot FV_2 \cdot \Sigma FV$ の3つがあり、柔軟性と創造性の指標となります。配点のレンジが狭い(0～2点)ので、図6-5では $FV_1 \cdot FV_2$ とともに横ばいあるいは緩やかな上昇にしか見えませんが、 ΣFV は加齢とともに明らかに上昇してゆき、加齢とともに発達するパーソナリティ特性を反映するものであることを暗示しています。

言うまでもありませんが、カラー・ピラミッド・テストでは、「できるだけ違った形のピラミッドを作りなさい」といった、創造性や柔軟性を刺激したり強制したりするような指示は決して行いません。反応はすべて被検者の自主性に委ねられています。そのような条件下で被検者が敢えて多種類のピラミッドを作り出さなければ、それは必ず、被検者の自主性・自発性・積極性・関心の広さといった創造的なパーソナリティ特性、さらには柔軟性・流暢性・独創的といった拡散的な思考形式と密接な関連を持つはずです。この概念(形態変動性)は、実証的なデータとともに私たち(宗内^(敬)ほか 1981)が初めて提出したのですが、極めて妥当性の高い臨床尺度として認められています(中川 1983b, 宗内^(敬)ほか 1984)。

<FV₁> 好ピラミッドの変動性 (得点レンジ 0～2)

どちらかといえば、意識的、顕在的、内省的レベルにおけるパーソナリティの創造性・柔軟性の指標となります。得点分類が0・1・2の3段階しかありませんが、スコアが0点の場合は創造性・柔軟性がかなり低い、1点の場合は普通、2点の場合はやや高いと評価してもよいと思います。しかし、どの場合も、全体を通した変動性(ΣFV)と照らし合わせて再評価をする必要があります。例えば、 FV_1 のスコアが0でも ΣFV が比較的高得点(FV_2 が2点で ΣFV が3点)であれば、被検者の創造性や柔軟性は「(潜在的には)普通域にある」と修正されるし、逆に FV_1 のスコアが2であっても、 ΣFV が比較的低得点(2点)であれば、創造性や柔軟性の低いパーソナリティであると診断されます。

＜FV₂＞ 嫌ピラミッドの変動性（得点レンジ 0～2）

どちらかといえば，無意識的，潜在的，無内省的レベルにおけるパーソナリティの態様に関係します。FV₁と同様にこれも得点分類が0・1・2の3段階ですが，0点の場合は不適応や退行現象に陥りやすく，またそこから抜け出すのが容易ではない固いパーソナリティ，1点の場合は水準は高くないがそれなりに不適応状況に対応できる潜在的な資質，2点の場合は退行現象を起こしても軽度で，不適応から抜け出すことを可能にする柔軟性などを示唆します。

＜ΣFV＞ 全体の変動性（好一嫌6つのピラミッドを通しての変動性：得点レンジ 0～5）

創造性と柔軟性の指標です。

得点レンジは0～5点で，児童期から青年期後半まで，男女ともゆるやかに上昇していきます。これはちょうど，パーソナリティが成熟し，一般的に創造性や柔軟性が伸長していく過程と歩調が合っています。ピラミッドシリーズごとの形態変動性(FV₁・FV₂)では，意識的・顕在的あるいは無意識的・潜在的側面に限られた創造性や柔軟性が推測されるだけですが，ΣFVはこれらすべての側面を含んだ被検者の全体的なパーソナリティ特性としての創造性と柔軟性が推定されます。また，得点レンジが狭いことも影響して，FV₁・FV₂がやや不確かさがつきまとう尺度であるのに対し，これはかなりの蓋然性を持った確かな尺度です。因みに，中学2年生を対象に教研式創造力検査との相関を求めた研究では，創造力の下位概念，拡散的思考と生産的思考のどちらとも統計的に有為な相関関係を示しています（宗内^(敦)ほか 1984）。

ΣFVのスコアが被検者の発達段階の平均値を1点以上超えているとき，標記のパーソナリティ特性のプラス指標となり，1点以上下回るときは，標記特性のマイナス指標となります。

(3) 形態水準変動性

形態水準変動性(FLV)は，分化と統合，創造性と柔軟性など，パーソナリティの成熟と適応性の総合的な発達指標です。スコアは児童期初頭から青年前期にか

けて急進し、以降緩やかに上昇します（得点レンジ 0～12点）。これは、パーソナリティ一般の伸長・成熟の過程に対応しています。

FLVは、いわば、形態水準(**FL**)と形態変動性(**FV**)を統合し、一体化し、さらにそれを止揚した概念・尺度です（宗内^(教)ほか 1984）。**ΣFL**はすべての反応を個々に評定してその合計を算出しましたが、**FLV**では、同一の形質は何個作成されていても1回スコアリングするだけ、即ち、反応された形質の種類数を評価対象とし、その形態水準のスコアを合算します。形態水準が一般的なパーソナリティの成熟と統合の指標たりうることはすでに述べた通りです。しかしながら、形態水準は、統計的・集団的にはともかく、個別的な臨床的ケースの場合では、必ずしも有効な尺度ではありません。これは本節の初めに述べたところと重なりますが、形態水準が好P・嫌Pあるいは全体で最高点(6点・6点・12点)に達しているからといっても、もしそれがまったく同一の形質のみによって得られているなら（形態変動性＝0）、それはパーソナリティの統合性や成熟の高さを示すものではなく、むしろ柔軟性の欠如や固執性といったパーソナリティの硬さや未成熟さを示すものに過ぎないからです。対比的に、形態水準が低くても、そのスコアがすべて異種の形質から得られているなら（**FV**₁=2, **FV**₂=2, **ΣFV**=5）、それは柔軟性や創造性といったポジティブな知的・情緒的特性に支えられた、きわめて高度なパーソナリティの統合性や成熟度、さらには豊かな適応性の存在を示しています。**FLV**はまさに、このような形態水準と形態変動性の力動的関係を操作的に尺度化した、パーソナリティの総合的診断尺度だと言えます。

FLVが、児童期で被検者の発達段階の平均値を2点以上超えているとき、青年期で被検者の平均値を3点以上超えているときには、成熟度と適応性の高いパーソナリティが示唆されます。逆に、児童期で被検者の発達段階の平均値を1点以上下回っているとき、青年期で被検者の平均値を1.5点以上下回っているときには、成熟度と適応性の低いパーソナリティが示唆されます。また、児童期で平均値が3点以上、青年期で4点以上超えているときには、知的にも情緒的にも資質的に極めて恵まれた人物であることが推定されます。